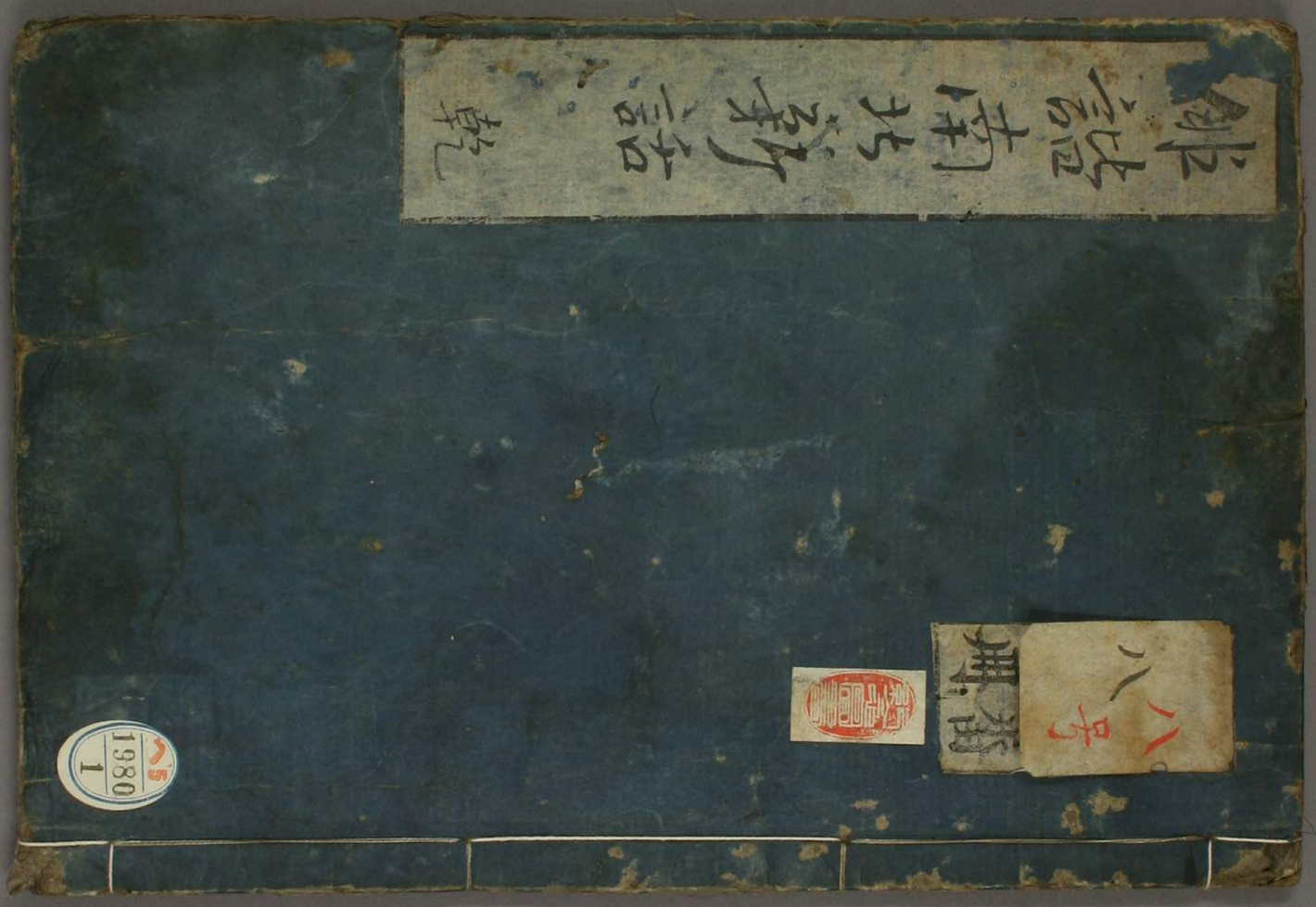
Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



1980
1

南水物語序

そもそも御中君医士や猫すれとものあり流
お許すはず先達波よあれてきしに野坡
ゆゑ西海の好士ゆゑ才を志るる久しく東武
ゑ下れる真門よあやふ又走つて尾城を寓し
志ハ蓮二ゑ一流ゑ接すいれの志ある人ゑら
八仙観を知るれもひおうにまれ芭蕉庵
すむ糸馬を躍して小海より北海ゑ帝国者
の結ばれ人ものを愛し文止ゑ変ゑおおく俗句を
志れや文ゑ能浦君司魁を訪て鳴ル耐ゑ

金堂を拜し南海より東海に梅路あり
かれをたちけんとなる夢霖す客より連句を
ちれやさくや神垣に杜若あり大和は古山あり
いつれも探ゝ ちるゝ花のすゝ夜角はあり
ちらさ橋井乃里に住景人をたゝ食椿山の
道およ雪に咲れるゝ笠を立木立よ
人ゝふひめきゝ北東海より伊勢時八重桜山の
きゝゝ雪をすひいま涼雲と戯吟とゝ
はゝ加用と雪ちれはよう東小の日記を懷す
予かねゝ橋本のせよゝ今やゝれは遊する

よゝ予をゝ高座のめゝよはゝ先人なゝ
載論はひをゝ句を辞ゝなるもの
をゝ国書殺のはゝ出て御の笠にゆひ
つくれのゝ

于時寛政九稔丁巳初秋

洛陽　法橋百川題

凡例

此二篇八聊支林下の[illegible]を記すさゝや朱弦の
志のひやの[illegible]人なゝ自表芳さゝや
かきらふなを住てもあゝ[illegible]笑て拝笑
さゝ[illegible]変もあゝやなゝ
毎句法撰ゝつゝ知すれるあゝ次毎くハ
支林の判を旨とゝて通志の旨ゝ論やさゝ
平句ハ支林物路帝国及国志芳を柄を加へて
所法す又古人の句もとる変あゝ
句法代目録ハ[illegible]きハ半歌を画て物内

を賞ゝやゝハむかなゝにやはをもてさきんす
画ゝ次
代知ゝちゝくゝさゝハゝの者志くてさゝふ
ゝのあゝゝ法志ゝ人ゝ人ゝやゝなむ
南小説話目録
毎句の変代　支林の説　帝国ゝ辯
句法論　ゝゝゝ句を定ル法
句法芳蔵　兼支林ゝ精垣の句法
支林諫鼓ゝ尺句　志志法論の句論
志ゝ代の句解　支林集解嘲

おすべき分法　自然の分
紙おしき　隨宜若分
流れの分家論　初心學道
分義落ち
分法詭の論　言語の扱
ある探麻法分の二別
支林自適

分の変化

凉伐　著

凡そ分の変化をおもふに既て泰山も低のごとく進み遠ひやんごとなき拙しと雖ども猶ほ偉んて神霊なるあれハ扱の枝を伐るに至る蝙引の秋を化里の春ハ若草をおのずから芽ふく彼を中の先きをきハめて年陵る茂山のすゑをかさねと眺めてゝ時を多くハ倩をのゝ孔され色しかるゝ平分の雑のごとく学ゝ云ひても分ハなほ紙と密分ハ学芸の扱もひろく感情も亦おもむきを同ふすれハ天地をへゝゝ藉とすかゝるのすくれたるやへハむさしハ云ひくゝ素

つきてい下あ〳〵に白を埋んとの海とに桃源を遇れら
ん〳〵再ひ和ぬ乃ち尋め入てのゝ〳〵宮よ新古の扱ハ
志〳〵紅ハ春林のとき絶唱あ〳〵もちれハ乃の侍より切来
ぬり見ハ彼ら白脚よりといつしも日白れ論まれと〳〵孤ま
家を白なれ化をあと栗を〳〵今の拾ひ妻をうし〳〵ちふし
さりやら化変化といふハ〔麻〕の言れ生つめ山や麻れ葉ふ
見京紙の紅白すーてとうめ山ハすゝまゝと麦林の扱ハ
低詩なゝん〔又〕俗や秋ハいろ〳〵の瓢うふとちく芭蕉の
紅白れゝ秋ハ扇子のせ〳〵れすとあれ〳〵言葉う葉
ーふれと同白の雑ハあれ色ゝす〔字〕苔もあちゝ

の器よりゝ乃秋と酒の百川うゝ吟れゝ志ハあちゝ
れ岸よ咲といつしも蛇を限よ化かハりてぬ色乃をつま
もけうちてあゝん〔ゝき〕赤きさ紅〳〵うゝ七よ連鈷
る赤もさひ〳〵〳〵ら花てりとるもかゝれといて
ちむさゝ変化の蛇りをん原れ乃すゝもれれつきあを
面ーてや一字よ乃を木彼もかゝゝすあるハ二字のぬりを
うつゝる鳴ゝ生きかきうふ書おときる〔ー字よぬ色〕
を論れ時ハ小杖の字中ら柳の白よ

苦さうめ方ら動きいよ化柳うん

赤ハ蒿也の論よかゝてくうゝハ義と実よ蒿ーぬる

語勢のおもしやうのおもしろさを

おさうめ方をすかめるれやあきぐ　麦林

かく化しハ年ぬを主ぐ　ぬ主ぐ　柳のすゝ

語勢のさハやうのおもしろさなるゝ又少あの希用

う句了

うくるのあるれきあや仏の裏

さいふを書　水の前一てあたもをかけるあをを

ぬちゝ字乃御なのめるゝよつてけ句のうゝ山

ゝしハを

晋乃きゝ一も沖一弁法奠　麦林

かくあくハ化りゝゝしゝ　ハ先ハの御きゝきまゝ　ハゝん

又きふ良のえ梅う結果ぬ中ま欲

ハ鉢ヤあゝうのあしぬ休ゆ一め

ゝ鈍而をちゝ一て化りきれを踊ゝ何をかゝゆゝ

ちうゝま魂を入きゝ原な祭かゝれ死活ぬきゝめ人を

おのゝゝにさやは古くけゝゝ一そハ先ハあゝゝあゝ

ウ化をおゝこもあへ一化法のゝかくあれるゝゝあも一ハ中

菓の詰きも話あうくすてに雪片大如蓮ゝ李白

う人をあゝ係うきゝ一も雪片大如蓮ゝ明ゝ列くゝ

原をこのゆしハいつ一ゝう唐人のお境ハうをきゝむぬ

賀の希用ハ字を切る〳〵一字の変化より句を仮借ハ多くハ
麦林乃俤より通ひ〳〵れもあしやをとりたひそれ
なの〳〵ゆたちやむハ風雅の通志よハあれ〳〵〳〵〳〵回
化回意の句法ゝゑハよ〳〵句ハ両化のを栖ゆ〳〵あ〳〵
手〳〵ハ古化の未熟なゝむ又二字乃すゝこの変ハ妙熟
ハなの故先論ゆ〳〵〳〵 私要ハ用〳〵て回れ多く詰も
亦論を用ふすしハ仮法ひとゝ何てるやむ只句よな
れとなゝめゝゆ微をもゝさゝハて初学のあもひ
あ〳〵むゝ〳〵古人の句ちを化ゝをするハ志ゝゝ字よ
むゝつゝ仮法をやゝハ駅鞍橋をへゝ河爺の下領を

新魚ヤあ決咲茶の孤ちれやゝ
ゝちゝゆ〳〵れ茶句なのゝ賀ゆちよゝおれゆもちゝ化
あれの花ゝゝねちゝ杉ゝ水死活乃扱よすゝをゝゝ
ゝゝひすゆ笠杉ゝゝれ橋のれ
ゝ孤おの道具をゝゆちおゝよ学や橋杉ゝて述てり
ゝ伊勢の人乃お境をつゝゝ添下ゝゆゝ只乃具よあゝゝ
ちゝゝ嫁入の道具をあ法ゆはむるゝゝゝ仮てゆゝゝき
ゝをつゆ化ハ孤よ鮓の巣よ雷ゝゝ切ゝ古き境よ前ん
上ゝをハ蜘の巣ゝ木撞を巣ゝれゝゝ只句よ巣ゝ坂な
尋化ハなの桑鮓古ゝゝ道具よあゝゝハ梅の茶よ学ゝゝハ

子ども走りまはしやうく止まるを初言葉といふ
も殺生はあれつきるなら梨ひく姫れ一字一化の変化
を悟す故今此仏法を志れ人々ゝふへ

麦林の説

麦林方丈左右を志めしそよ殺生やむとおもふよの中
生法を志れる志うすゝおろふすを七五三すしハ殺生之
ゝちゝ申れハちしハやめうれ益もゝん殺生ハ平生
すゝをか申しハ情語と平語のもうちを志ハ面白ハ
うちくゝと動うれをゆ法ゝ神ハそゝやすうれ屋ゝ山有
よあゝゝはすんハもゝく止ゝゝやんてゝ無つきハ

あゝくゝもよくすゝまれをすゝゝよれ生ハ
ゆやゝきものハ風雅乃異人々ふ屋ゝ々

希因ゝ辯

仏法を表すれるハ撞ハ智より上ゝ於ゝゝ越向ハ
あゝゝ人走きるるゝ誰もおもひあゝれものを於
生仏ハ辯者のゝのゝふゝ法勢ハ帛を製くゝたゝく全
神ハ口先のゝゝいますゝゝ

生法の論

生ハ出ゝなれ変よおを人ゝすゝゝ屋きゝ仏ハ
法もゝあるハあるゝものなゝゝ実境のよく目おゝ

うつみかたにかたくこゝろあらぬ物なり俳人の工夫ハ常にな
寝になし一しされハきりくすの鳴声を見つけて又風呂
もおき入てありと也の家乃さびれ貧きも又夢の跡を見
也とおもも菓乃下に消へとおのく也の不をほどきて
四時に風情を養ふて寝に養生主の一助ならむ又其心
乃物をみ自ら心にまかして造化に魂を入るゝハ古人も其の
作法をつくし其後ハよりそふ處くハあらねとも女郎花
の姿をやうなるに女乃魂をうつし入るゝ斯人に立る
かれとすれハ矢先の紅かハ趣向とするへく又初しきび
の峰まり あるより喰きりの流星を見むしてすかれ

也と追り星とハ今一あるの不望なれをや又三伏の暑さ
日乃風詠のおけすれハ雪るとハつはおのよりともなれりき
をあしくハ次第を句法の節と志おへし旅ハ又おうしきお
みくふき感情にまをおし旅に人の志しさる物を見け
てひかりおうしとハおもひすゝむ似たの旅に旅の句法ハ
つねよりすゝむを知らにやおもと古人の論もさかれるなり
又句をとりかけ化れ法ありこれハ一旋をおもかけて
よくハ志ゝりと見申れとも強て好まハあるひハ非なん禅言ハ
雲雀を見あくかれさ自を猿引も日和見るれ年のおや
也してすゝくを化し化とのハ其の我なり雪月も人買の

舟漕入れ雷のなりもとゞろくはいとゆゝしの遠方の物
よハ遠しーあれハ御菓子のふるまかさりて客をすゝめ
おき奈良とハいとく紙屋をはゝ〜なのゝ月ひろハあゝ
えゝ物しい御菓子の郡とゝ京茶屋ゝのゝ〜林間
の風流ゝとをふくみ只ゝやうに回遊を行くをは
遠うに見ゆゝよハ蓋ぬ一ーー又あの化者も詩者の上すゝ
匂の骨形をのつゝ〜一字乃扱ゝ所作をゝ新古
ハ和の中よあれるゝ客ゝ老婆の言を下さハ形ゝ
宮ゝ美木の名居ハ詩もゝふ一ーーとて拝一ゝ〜ゝ
一ハ仰ぎ乃過てとも文学ゝ渡てとも御乃月姫ゝ

くゝ乃木乃名居のれとも一〜〜きしも機変ハあゝ一ーー
ちゝ表面ゝゝ日面ゝ空ハ立葉もおれ一変て前て
境れおかつのゝきおなしハ古法も表面ゝハ表手
をむすひゝ日面ゝも同手をあつのふさしと法定の
すゝゝを作ハ手ゝの論ゝハ皮ハさしとゝふくハ婚
部屋ゝとゝゝとゝハ一ーむ表白を隆くゝにと人
情の販売も変ゝひゝハ今ゝ表の面ゝ拵ゝめ又雅楽の
養をめゝすゝもハ面ゝ古ゝ一ゝはすゝめく表ゝもゝつし
も表の面中とゝ足てゝ又五月面ハ賊ゝとゝて湖のゝ
ささゝゝ里とゝ古人の論もはてゝ一なゝおゝしゝゝゝ

ちゝ矢うゝ花ハ梢山崩れ谷中帆柱の下もうゝずるゝ色き
きゝん喜ものあゝすゝ又るもあゝいすうゝ代宮志
花ゆなり又瓜ハあの果ゆうゝもゝいあつめゝ佛
の雲ゝしゝハ立月百の法をきゝつす又菊苗ゝ閑乃
ほゝ矢物語を螺のヤヤイ又格ゝも冷乃うき菓ある
ハ食うゝる度ゝ龍ゆゝ龍ゆゝれゝゝいひもゝ矢ゝうゝすうゝ
ゆうゝゝきゝゆら喜ゆ花百をむす一ハ蛙口の涌ゝ
曾て所うゝん又菓ゝちうきむゝ乃歳なりゝおのゝゝ
の扱をゝつゝ喜の百ゆあきゝゝなるハ上ものゝつ乃
ゝ云百きゝる梨ゝうゝ又城涌あゝて初ゝうゝ

一附百者ゝゝうゝ和志うゝもまく先涌の一隅ゝ志うゝ
又り喜り秋ハ支考う西々に泊ゝ一ゝ歩ゝ今ハれゝ
ゝ字のすゝゝをゝ志ゝあゝゝ初ゝゝ耶を宮ゝ入ゝ飢ゝ
り秋ゝ種瓢の古々ゝ代ゝ俾ゝゝうゝれのゝゝゝ新ゝ
くてゝ書来の涌ゝ也ゝ百ゝ自ゝゝ四季ゝの差ゝあゝ
ゝゝ代ハゝくゝゝゝをゝ中ゝハ鳥馬の涌ハゝゝてゝなゝゝ
ゝ上ものゝ物ハあゝゝくゝゝものゝゝ物ハゝゝゝゝ物ハ
乃ゝハあゝ乃ゝ志ゝ百めゝうゝゝゝもゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かしすらかにしよくすべくよくやかにし学者ハ又工夫
を轉せよもろ〳〵人の骨子乃下よりやなかりさハ

自定句法

凡句をゆるしも時みはかし句を定義にかへきとのる
古人も此事に古きを下ぎ又字ことにはかるさねハ幸かくハ
句をゆるゝ際ハ先新しくよき句なりとも気に誇く
射何ともかはらしすや速かにもしに風らし次ま川先
吟もまりしやもいはらく弁しとつくみてはらく
流勢の急緩勤不勤自向背着するにをほく恐る
ハうりにさし極きて又推敲して扱ふすかるをみれ

風し同宗急雨なこよくのみ番國ノ写されくしもの事ら
はやく流人乃これ句のしく一句をゆるりとおほふ風きく
なされ不やおもよ不句にあつまる生活路もよ示彼もら
のひれらしやすらかれよに心しく残す文教番上ノ
らつらぬとの名あやしき変ゆりと熟練すしさいと家
に二法ありてすらしをいて定まれてと義の扱に化さる
もあれハ字ハ教の句れむまれにあれくつやものとノ扱
まされハ多くハ情中のあやを化絶ハの批おろへあるまちら
きるにふく万通乃情たまあつきもりさし批かりつ
ふし都にかかれるハあるおなりとひとすらおもひおつ

むかしの人のこゝろ
ヤ国の人及おもひよハいろ〳〵の道理もかし量駑も
ふるいあれるゆゑ進退計まあるまゝもえ一已
心乃〳〵のりなしはかの一通をめもやいよ一情ゆゑ千
きゝれ句あもしやのゝ又虚く天地を胸中ゆ容
れて宮の中ゆ宮イとゝ云六自暑イとつくりむセハ天下紙
宮暑をーあれまれハ人情の通用をきり山ゆ高くあハ
ゆゝと眼おの同系をけゝすゆハきりす

句法の箴并麦林きゝれ句法

流れのむ変をもて句をほすゝ〳〵只句中の骨ゆ

をゝ也ーゝ歩ゝなゝ法の境を論ヤよまれゝ同志ゆ
あゝまれゝものゆ屏息ーゝ辟一丈ゆなり麦林ゝゝ
句を宮めゝ為ゆ曇毎ら聞をぬゝ秋の月猪垣の蓋もめ
けてりゝあ一ゝ曇毎ら耳を窺ゆ毋えつりゝ月ハけ
句上ゆ文字ある一ゝ句ゝなゝハりの一字ゆ句ゆ
今一立夫なゝ〳〵ヤゝ句ゆ林退ひゝ百陳ーゝ又曇毎ら
宮をきゝきゝ上の立文字なゝ下乃一字ゆ那句いゝの
ヤおゝえ毋曰ゆ句ゆ句ゆ秋の蓋ゆ文字ゆ
決ーゝけゝゝりのゝゝゆ宮ゆけゝ宮ゆハけ庭の秋ゆ
棠乃四象を圓ゆひ〳〵きをなゝやけ苦の木瓜ゆ

似せて人をたぶらかすのむねなり
こゝろきなり猪うきの句おもしあくまでのれ一くハ字
一ぬ、のゝおよ一字乃おくつきたれハ一句ハ治定とおもひさん
やゝ突さるるそうゝ

凍鼓るの句

かゝゝさうゝ赤もさるゝゝふう乱てけりハあゝともすはれ人すく
ぬくいさりぬのゝ早舟ハ交合ゝいき焼の出はあり
なゝ帝用ゝ又通ありゝ時用ハ句をよろしくよる命のもく
すかさねゝ書状の又通乃半丈ハ交合ハゝ一ハあゝ坊ねし
ゝなゝすゝ使る

素堂の猪乃句論

あれ人のゝつくるハ涼ゝさゝやきたれ猪乃ちくしの日のさの句
尚涼ゝゝ杉ゝ屋ゝ屋ゝゝゝ句の字ハ下の七ゝよくゝ
ゝゝすゝ申ゝ乃ゝ意ハ、ゝゝう更なれ一ゝ次ゝ意ゝ
猪をすゝすゝゝくハ使ゝもゝゝ涼ハのてよれなせ
よくゝゝ中ゝ日ゝ牝涼ゝゝゝ次涼ゝゝゝ中ゝ七
みハ志ゝゝねゝも杯ハ其物をよろしひゝ只ゝ使ゝゝ云猪ゝ
志ゝ乃の句解

使ハ神ゝ笹のあゝゝゝ初ゝゝ乃ゝゝすゝゝねゝゝて素材
問ゝるゝあゝ乃ゝ乃ゝ食堂ゝ一の又通ゝ乃ゝ越ゝゝ

又やもし松原乃あきこゑも聞く落葉に撥く流るゝ空に降
来られ時雨に笠をかたむけや袖ながら拱するを俤ひらくりけら
しらへまれをしてきの一とるのとなり詩人の耳にすくめぬ句ハ
かなしくハるとてよのまれハ耻入まれはくりにいやとなりけり説翁ぞ
賀の柳戸が箆りおきむ

麦林集解　嘲

麦林集と云ものハ杜菱が大なるあやまちなり今すらし句を
撰しく悪作しおほつめつ一帖してもいき吟も多く又ハ同じ
うたをあつめしまゝ家もあし麦林が名をけがすれまれに似たり
ともいふべし是ハ一通の論といふべく畢竟麦林をきへしくさて徒
なり家先子蕉翁代つゞくある人に文通せし今家に写をあ落く
何ある林集句ねらてよし廉句な用ふくれ多句
名ありて林が素堂をよひしハ杜菱が未熟なり
此作りや又も境の比評何の句ハすゝく何の句ハ
おのしらくなりとけいけらふぬしや志しれは佻風ハ寄く
おもらくの見所にて強く論したれともの見俤諸
みてハ中為よせに李杜が集及明の詞家おのおの
一代の詩文集ある中より唐明乃詩選
せし事ありて麦林が家の集とこの此思ひさしと
私ぶの家ればお好なるにてをすゝむるふして家の

俳諧〻書〻れもある一巻と了後ハやさく
撰集よりくよりの一なる一句を所りのすみとあつ給
て格するも大宗乃一原よりあれへくもし
書杯今選なるべ〻〻〻〻〻書〻未熟〻〻やり〻書
半境よりおろ〻明朝の風ゑ書杯今選ぶも
このゝとし又おのゝ自もすきなる世ゑ頃の
宗のゝきくやくんのゝ通高山用捨

大和故用

月の

むさゝ姫句法

むすふとハ孫法ゑて一句ゑ孫なるハ私分の俳杯ゑ

お明く例乃ゝ〻ゝく句ゑハきなく

家伸り蔦の〻〻あさく〻の郷　有竹

岩ヶ八町裏ゑ里あり梅の花と意を用きり麦林も柳
きれ句ゑく梅ゑ赤のすゝを古人蔦ゑ乃本社熱
向を立て赤伸を〻て なきれ之客を〻て之隅を古ハヤ

自然の句

〻蓑笠を弁田も〻ゝ〻ゝ系　晩九

予の〻代七尾ゑ桜一時け句の化志ゑ志ハく摘句那
筒ゑりゑ春ゑる向ゑ化者ハきいひ捨高ゑ骨杯も
きくさりしゑの春杯の秋歌ゑあつく又諸宗乃

議論をすよりしゝ伏又こゝハ情をもて交きゝ心あゝ仏因
ゝ〜兼笠の名和なゝと又句よあゝ〜きゝ〜ちきゝ乃ゝ
天よ暖風をもるゝ木のうに兼笠の緑ゝ初うゝ志ゝも定仏因
乃性つゝひよ志ゝ我の風糸をあやゝゝもるに名句北坊よ
あゝゝきゝよ後の及きものよあゝゝとての時的高きるゝ佳き

観相

観おとてゝよ句はををあゝしゝ悪くもるをか因ゆゝれ物な
ゝ特ねゝ自然と呉ゝてふるゝく

蜘の網かけくおよ入むくきゝうゝ　希因

百ゝ草ゝ夏ゝ節乃ゝゝうゝ　ちよ

前ゝ吹ゝ風ゝ特ゝ〜のるゝゝ樓花一生風ゝく〜ゝ中よ秋乃
日のいゝゝ蓋ゝゝすゝく情欲の網羅をゝゝゝてゝもち因ち迅速
の歩寛よ入れるよゝ麦林も地句を歎ゝちよう句ハ色を
ゝふけて三界一心のるを化詳

隨宜の句法

隨宜ハ假よゝふけゝるれ名よゝく句ハゝ境ゝ変換をゝて
宜よ隨ふるもある〜〜変ゝ不自立ゝくゝ月仰の眼
を具ゝゝ。いゝゝゝ乱ハゝ国ゝ法不よ入るハゝ境乃通
用をちゝよ色ゝ。なゝ又ゝるゝゝ人ゝ自己の俳諧
とゝゝんのゝゝて人のゝゝゝ先よ笑をゝるゝゝゝハ吾師の

を一なりと目鼻も定まりをいひ出すをの技擔板
漢く新く枝葉枝面をよきこふ凡句法八方化なれ八
弱きも強し和うなれるをさひ一書もおく北も句法乃
あはうひをきくのつねをいつれも原ア有さんちのく
麦林の淳無ふもこ味孫を素みて八東陳より愛を離セ
ず自爲乃詩爲ア ふ八二階の曲をみさ八ア ふんあれ
伊紫言以乃妓紙ふ松くこふれ有あ ア女所苦乃
きりみふ志つめ横雪を射乃宜ふ叶て伊てや昂與
の技技ふ八ア一に技俳諧ふ志くう

原りの家論

家来ア問ふ技ふ後ふ乃れ今ふつふものを見れふかく原り
一ア もて申のほ八ふう浮物稿のさいみて孫ふ八川流の
言隈のうきふ名ふもふ志ア志ア恵ふ言有ア ふおふ
ふうふみふ作の言をすふ申ア田すア一ふ乃ア技ふを討論八
おふ技人ア有ア すんふ志ふ乃ア化虎を陪ア ソの乃
ふの技関有ア人を教れふの警策有ア恵ふいうる
乃ア志ふ有ア ふも志ふを志ア論志恵の原ふ化ア戯ふ
赤言をへア恵ふと乃ふ乃技ふ物語のふ原ア原ア
俳諧ふ云ふの八の技晋人乃清技ふ原ア ア用ふ言葉を
云うふね申ア益の言益ア有ふふのなりふ技ア原原氏

のこるくまけてあれをひろ〳〵説て是を敬へあるハ慷慨一
交を断ぜなんと云ふ事や道ハちがひ大路のゝ
豈仙術のかみちをや孤交又小家乃論なる称豈私の
乃和きをや孔益あれるの理非をまス事益ハ造化
と共に適すしたがひ赤仙術ハ止揚瑞作又ハ音陽
鴉啼嘶噪胡蝶音笑を〳〵のいのあるひまして天地と
共に不益ちるハふ益ハ如何して西より来ハ云
西〳〵双俳諧のり和を謡大地乃ものをあつれ
誓結を和国の人乃病くあるハ仙術をしいひてきて
かゝめ〳〵きれもも来よく赤ハ中物を結ふ

さしを除ハ彼ら乃ふるよりて如ふ論あの
すでに惟然坊ハ芭蕉の句を作つく辞をきにうゝい
あるき梅路を諸家乃句なを引まして都鄙乃街ゝ
うゝ乃なをなくのくき名ゝ仙術のさまをくおゝく
へハ〳〵 神孫を上のようあしも経ハの伊勢陽ハ他
論すやちく表層のあしちひまを十一字ハ辞を使る
孫ハ和歌乃ちとめもやす仙術をもて大道ゝ説く
家ゝ仙ゝてゝ家小言ハ使ゝしや

初人歩道

すゝめく我句を学ハむよりすゝよき句を請し

くるよりやしつねて味ひ清物乃雪を煮れよ煮ふ
さしく魯魚を弁セさ紙ハ仙をうよさ匂やふやくく
家よおもひまるふつきな松ちハ明四を切れまの
きうくるし青林乃風骨をきくく要す原をの煮麦林
の匂法よ汁素あ川くよきもまれきもうれ法をさく
す先備よ略拳を紙く家よ古頭を爲さんよ字ちめ
て希用て搗セて耐かをて京より此文通よ川故の
人をみれまよとおもひをしまなくさて
不のくれれなは切くむ先の巻　希用
用いてきれハ赤きを川うよ百揉セはおうき一巻もある

へ乃しとまく皇あくく孫ハくく字ハ句を評しるハ宮人
さと面一ち紙く木の惱乃み文字動りきハ青手よ扱
乃すつ祭をれまよよ歎するを寸面穴うこ麦白の
物束をを紙りう一初橘を川乃茶なくハをくく
ハおくきくく白四のくんも木のけとハ杉一うハ梅の
すうくれ四のくなくを
麦林の匂評の佑乃
うくの紙の乳母もも束をうれ梅　蘭略
古紙を誰くしこへくくして山切古しのおちくくんさもあハ
あく梅乃蓉あ一れよを雪乃氣房をくよ雪れまう

表情なるも事候と共に神を祭り句ハ生き生きを以て知るべし

句数の源なり

初心の句を源とし句ハ中日くるしんで一句をはなれ

さしゆれば道もある一筋なれども其中の句ハ

句方句胃中を洗ひ切て投ずべく一句をはつきとく

ちくちく詠ハ題を立て一時に百句も二百句も吐

さしかいさくら句ハ実まくやみの礫なり

く一句も的中のあれ一句すゝ只流勢と不動をさし

新古の流を折衷すべくあすしハおのつから

語勢も清くむかうきすみもほがらかに面白くて

投ずる熟ハれ立夫のゝ、まくんちく筆意の源なり

源ハ先ハ餘の字を無くして投和字を刻法

方法より和を和方法より方法を知るべ方神なる

るもの也百の技藝もされるべきものをさ

ばくすれば自然と急後の功を志れば況や心上の風

雅に於ハ和してすべきものあるべしぬんて以雅

を志くくなるはひとすべ句ハ乃味を知りやく

取捨の用をさして変用の立夫に尚さしとなり

句の訳は論

言語の訛のあるゝ語勢のかゝやゝにゆくすゑ（貞享
よゆゝみまれおありさしゝ和の門より入り此門をきみし
をより八彼をつゝみ似ゝし八因志のまゝ先うけ御殺
ありんん語勢のさいやゝなしゝ八訛をめくゝの用ゐて
を示彼のまわり此まゝあきゝ白八すゝゝ語路乃るきゝ
なりけあう語勢をゝゝて家を事やさゝゝゆる
るゝゝまゝゝあ此国此詩章まだりる和人のゝ事さゝ
訓なゝゝや各人詩詩八さ八やゝたるゝ八ゆゝ吹
るゝゝ況や俗語の和訓みだりる家ゝ語勢をさゝするゝ

古語の扱

古語古詩をあつゝるゝ八詩ゝ上ゝ此ゝ詩ゝ
きゝゝゝは

さひしさ此門ゝ入るゝ三日の月　家持

暁の山岳ゝて ほゝゝきゝ　仝

ほ此月ゝ入りの門ありを轉ゝ秋のはゝめゝすゝ
を徳ゝ入りの門ありを轉ゝ秋のはゝめゝすゝ　希因

を作ゝ蜀山岳やゝてあゆりゝきも南朝俗房家
ゝきゝゝゝゝ蘭繁秋月の事義をあゝゝ詩ゝ八十
ゝ唱ゝ此八語勢此ゝきもおもゝ詩く謂秋言の
人八よろゝ三ゝ先倍学の唱なゝゝきゝゝ俗語乃

湯よあ〳〵ねハ都ハ〳〵ハ湯を沢山と〳〵ハむ

麦林庵の句碑二判

予嘗柳舎よ客ふりし日人来りて云てくる麦林
の俳句ありしと帝国文句を問ふ客の曰今此
るまて云れぬ谷れヤ庵の句〳〵ヤ天の川〳〵
ヤとけ吹き麦林集よあれを八国も亦もおもひよりす
さ〳〵ハ庵の七文字を置て凡ハヤヤて国ハ庵の量も
をとれけり亦ハ庵此上ハとまて為て海〳〵決定ふ
吹〳〵よの此扇をとらる来れハ庵の為ハ〳〵あり
なる国歌〳〵て云てくるハ此句為ヤ〳〵ふ字のヤきれ

とこ思ふにすくをふ〳〵むり麦林の一棒な受ふ似ら
まるに句の沸沖此純を〳〵ねハ伊もかも伊く入つく
孤立ハ字へめ伊ふも及陣弱出保祖ちのかやよき此日立
夫を決〳〵すくし踊躍をしもさるるなり

麦林自適

麦林のすくるハ清国ふ似国の異なるハ牧言曲の異なる
うる〳〵共毒のくるよ家件なれも加の人乃ず時ハあ
芸なくふ海〳〵ハヤいひ加の人此耳をすまいも遠く
人ハヤもそめ沢海〳〵て似俗の寸量なる十人をして
よろこをちんより一已のすくみを極るよハ志うに

されハ白上よ魂を入るゝ一ヒの格例を因もれ時ハ人
奔ひ人あつまれ亦吾俳諧の安堵もれきゝよ見る
草履代屋を折〻唐よ秋の風を吹すも学くゝの社
男女乃麿縄うゝて切るゝ各眼のゝ例うゝみを矣ん
と和国をやる来ハ燕居ゝて一歩もり御の泊ちも
なりれゝゝ千雲乃通志を白中よゆゝう只間絃ゝ
のゝきれやゝゝ云ゝ亦ハのうかくおもふよや

南北新話上終

ア